

進化している 『ジーニアス英和辞典』 —英語のレトリック表現研究の視点から



後藤リサ

筆者が学生の頃に愛用していた『ジーニアス英和辞典』初版および改訂版と、第4版や第5版との用例の違いなどを比較してみると、語法研究の視点から様々な気づきがあり、興味が尽きない。

■ if 節の「隠れた」条件性

以下の(1)(2)は第5版からの抜粋で、いずれも初版には無い用例である。

(1) *If you are hungry, there's something to eat in the fridge.*

(if 項④；もしおなかが空いているのなら、冷蔵庫に何か食べるものがあります)

(2) *If you don't know, I won't be in town tomorrow.*

(同上；君が知らないのなら教えておきますが、私は明日には町にいません ※下線は筆者による)

(1)(2)はともに、「言語表現上は見えない」条件性（「もし○○ならば、以下のことを告知する」）にかかわるものである。(2)の訳では、「見えない」条件性を「見せる」ことで、用例が伝えようとしていることを明示しているように感じられる。聞き手の推論に依拠すると思われるこうした「見えない」部分をあえて「見せて」いるところにふと目を奪われるような時、語法を「読み解く」ことへの深いよろこびを感じる。

■ 英語のレトリック表現

筆者は英語のレトリック表現に非常に興味を持っており、これまでに度々研究対象としてきた

が、レトリックという観点からも、初版から第5版までの変遷には大いに刺激をもらっている。たとえば、修辭的な紋切り型表現には、日本語に類例が見当たらないような、面白いと感じられる表現が多数あるのだが、ここでは特に if 条件文の2例を紹介したい。以下の(3)(4)はいずれも第5版からの抜粋である。

(3) *If that is a diamond, I'm a Dutchman.*

(Dutchman 項成句；それがダイヤモンドだなんてとんでもない)

(4) *If he is a pianist, I'm Cleopatra.*

(if 項⑤；彼がピアニストだというのならさしずめ私はクレオパトラね)

(3)の例は、初版から掲載されている例である。第5版の Dutchman 項成句 (p. 659) には次のように書かれている。

《英やや古》...なんか絶対ある [する] もんか、首を懸けてもいい《◆ if 節または or を伴って強い否定・判断を表す》

*I'm Dutchman.*は、条件文の帰結節として、または or と共に用いることで、もう一つの命題を否定する働きをする。つまり(3)のように if 条件文の帰結節に生起する場合、*I'm Dutchman.*が「明らかに偽」であることが話し手と聞き手の双方において前提とされ、それにより前件の *that is a diamond* もまた「明らかに偽」であることを伝達しようとする、修辭的な条件文である。

一方、(4)は「あなた(彼/彼ら/他)が○○だなんて(嘘を)言うのなら、私は□□であるとい

いますよ」という形式をもち、○○や□□で主語の属性が示される決まり文句として用いられている。つまり、(3)とは異なり、if節と帰結節の両方が揃って一つの修辭的な効果をもたらすといえる。このような例は初版には無く、第4版や第5版ではそれぞれ例文が示されている。第5版のif項 (p.1064) には次のように書かれており、その修辭性的一端が皮肉にあることが示されている。

⑤もし...が本当なら...ということになってしまう (が決してそうではない) 《◆話し言葉で用いられる皮肉表現。明らかに真実でない事柄を持ち出して、「...であるはずがない」という強い否定の気持ちを表す》

(3)(4)の事例に共通してみられる修辭性は、that the speaker is a Dutchman (偽), that the speaker is Cleopatra (偽) といった、命題内容が「偽」であることが明らかであること、またそれと同様に、それらに先行する命題が「偽」であることも明らかだと示すことで、先行の命題内容自体をくだらないと揶揄するような、話し手の皮肉的態度が浮き上がってくる点にある。

■日本語対応表現の乏しさ

ここで紹介した2例には類似の事例が多数ある。以下の(5)は(3)と、(6)は(4)とそれぞれ類似している。

(5) If he is a policeman, *I'll eat my hat.*

(6) If he's Irish, *I'm the Pope.*

これら英語の修辭表現が日常会話でも用いられるのは対照的に、日本語では同種の修辭性を示す表現はなかなか思いつかない。(5)の *I'll eat my hat.* については、「(○○が本当だというなら)へそが茶を沸かすわ／三べん回ってワンというよ」などが先行研究において紹介されているものの、汎用性が高いとは到底いえない。このように、日本語に対応表現がほとんど無いという非対称も、筆者が修辭表現に面白味を感じる一因である。

■ニュースになった if you're the Pope...

(4)と(6)の類似例として、ローマ教皇 (the Pope) 本人が登場する興味深い逸話がある。当時の教皇、ヨハネ・パウロ二世は、親しい人たちには気軽に自ら電話を掛ける習慣があったということを *The New York Times* の1979年5月27日版が報じている。以下に該当箇所を抜粋する。

Then there is the matter of his telephone habits. Until he was finally (and gently) talked out of it, the Pope used to pick up the phone himself to dial his friends around the world. One evening, telephoning his intimate friend Bishop André-Marie Deskur, a fellow Pole, at a Zurich clinic, the Pope casually identified himself. He was told by the Swiss operator that "if you're the Pope, I'm the Empress of China."

(Tad Szulc, "Homecoming For The Pope," *The New York Times*, 27 May, 1979, p. 46)

ローマ教皇がチューリヒの医院にいるデスクル司教に電話を掛けた際のことである。スイス人の電話受付係が取り次ぎ、この教皇と名乗る人物に対し、ユーモラスな表現 "if you're the Pope, I'm the Empress of China. (あなたがローマ教皇なら、私は中国の皇后ということになります)" で返答したことがニュースになったわけである。そして、ここからは筆者の想像に過ぎないが、電話受付係による返答が驚きや戸惑いを示す音調で発話されたのであれば、「まさか！信じられない」といった強い否定の気持ちが加味されることになる。あるいは、電話を取り次いだのが察しの良い、医院の受付係で、渾身のユーモアであった可能性も棄て切れない。本記事を書いた Tad Szulc 氏に真相を聞いてみたいものである。

(ごとう りさ・関西外国語大学准教授)